

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスペース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

季節はすっかり秋となり、東北では朝晩の冷え込みも厳しくなってきました。9月、10月と立て続けに非常に強い台風が、日本列島へ接近・上陸し、各地に大きな被害をもたらしました。被害に遭われた皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。カリタス釜石、カリタス南三陸、カリタス南相馬など、各ベース周辺でも被害が発生し、災害ボランティア活動に参加しています。災害ボランティアに参加をご希望の方は、詳しくは各ベースのホームページ等をご覧ください。

今回は、八木山オリーブの会の毎年秋の恒例行事となっている「芋煮会」の様子と、少し前になってしまいますが、この夏休みにカリタス南三陸とカリタス石巻ベースでボランティア活動をされた高校から感想文が届きましたので、ご紹介します。最後に、チーム・カリタス仙塩が、9月にカリタス南相馬と福島原発事故被災地をバスで見学した様子を簡単にご紹介します。

8回目の芋煮会

八木山オリーブの会 野田和雄

八木山オリーブの会は、9月25日(水)、カトリック亘理教会で8年目の芋煮会を行いました。津波被災者に寄り添い続け、皆さんが仮設住宅から復興住宅に移転した今も集まっています。

被災者の方々は、オリーブの会に来るのが楽しみだと言ってくれます。他にはない大切な場所になっていると、参加者の皆さんが実感しています。それは、復興住宅で一人で食事をするよりも皆が集まって食べる方が楽しいし、お弁当を取るよりも手作りの料理を食べる方が心まで温まると思えるからです。

被災者の人々が集まって来たので、前回自分たちで作ったショルダーバッグを持った姿を、一人一人写真に撮りました。自分の好きな色やデザインを選んでいるので、着ている洋服にも似合っています。少しおすまして、にっこりと笑顔の写真は、次回、教会に掲示して、ご本人に持ち帰ってもらいます。ご自宅に帰ってから家族の話題になるはずです。



オリーブの会のはじまりは、被災者へもすっかり定着した祈りから



おいしい芋煮が、亘理教会の台所で作られました

台所では料理スタッフが芋煮の準備を始め、敷地内の保育園の園庭では男性がテント設営を行っています。差し入れのケーキはカットして、個包装し、配るように手配するのも慣れたものです。チームワークが生きています。会費もしっかり集めています。

芋煮会を企画したときは、料理が出来上がるまでの時間をどのように過ごすかが問題で、毎年頭を悩ませていました。しかし、今年は、何と、保育園の子どもたちが盛り上げてくれました。

まず、4人の園児たちが、聖堂に来て、盆踊りを教えてくれました。「月夜のポンチャリン」は、保育園の運動会でも披露したもので、子どもたちは上手に踊り出します。被災者もスタッフも、見よう見まねで、手だけ動かしてみます。次は輪になって、子どもを見ながら踊ります。うまくいっても間違っても、踊りの輪に笑顔が広がりま



園児に教わりながらみんなで一緒に盆踊り♪



園児たちの一生懸命な姿を目を細めて見守る参加者たち



す。参加者は、60代から80代。40人ほどが踊り始めると、亘理教会の聖堂が狭く感じられます。中でも背の高いパウロ神父は、特別に目立つ踊り手です。曲が終わると、額にうっすらと汗が光ります。教えてくれた子どもたちに、感謝の拍手が起こりました。

聖堂での踊りが終わると、園庭のテントに移動しました。目の前に広がる園庭いっぱいに、園児たちが円を描いて集まり、今はやりの「パブリカ」の踊りを「パブリカ 花が咲いたら 晴れた空に種を蒔こう……」と一生懸命やってくれました。小さな踊り手たちの楽しい演技に、皆が思わずほほえんでいました。お孫さんがこの演技に出演しているという被災者は、うれしそうに目を細めて見守っています。園児たちは運動会で身につけた歌や踊りを私たちオリーブの会のために心を込めて演じているのを感じます。

園庭に大きなバルーンがふくらみ、子どもたちが中に入ったり、踊ったりすると、歓声と拍手が起こります。被災者にとって孫のような子どもたちから、元気や若さもらっていると感じます。

子どもたちの演技に拍手と笑顔が広がったころ、台所から芋煮のおいしそうなにおいが、漂ってきました。



青空の下、大勢での食事は格別！



囲碁、将棋にこの日も夢中の男性陣

テーブルに芋煮のお椀、お新香、お餅、ケーキが並ぶと、パウロ神父による「食前の祈り」が始まります。被災者の皆さんも、手を合わせて一緒に祈るのが、オリーブの会の習慣です。

秋を感じる芋煮会を、毎年行っていて、今年で8回目になります。食べながら、あんなこと、こんなこともあった、とオリーブの会の思

い出を語り合う人もいます。皆さん、おなかを満たると笑顔もゆったりとしてきます。

最後は、なつかしい歌を皆で歌います。手にしているのは仮設住宅で使っていた歌集です。「亘理町旧館仮設住宅」と書いてある歌集もまだ現役で活躍しています。ギター担当の鈴木さんは、近頃腕をあげたと評判ですが、ムードメーカーとして貴重な存在となりました。リクエストに応じて、「秋の歌」や唱歌、演歌を歌うと元気が戻るように感じます。

今回は11月27日です。それまで皆さんお元気で!!



食事の後は、室内に戻ってなつかしい歌を皆で合唱

初めて知った東日本大震災の被害ーボランティアに行っ

カリタス女子高等学校

カリタス女子高等学校では、長期休暇ごとに希望者を募り、東日本大震災被災地復興支援ボランティアに高校生を派遣しています。今年の夏も50名近い生徒を、東北の地で受け入れていただきました。高校2年生(17才)の感想をご紹介します。

私たちは、今回初めて被災地ボランティアに参加し、宮城県の南三陸町、気仙沼市、石巻市に行きました。二日目に、震災遺構案内に連れて行っていただいたことは、心に重く響いています。案内されたのは、気仙沼市の岩井崎、震災遺構伝承館（旧気仙沼向洋高校）、南三陸町の高野会館、防災庁舎、多くの人々が避難し無事だった戸倉小学校正面の神社、そして石巻市の旧大川小学校です。



高野会館（3階壁に津波到達線の表示！）



震災遺構「旧気仙沼向洋高校」の校庭

旧気仙沼向洋高校では、津波の瓦礫をそのまま保存していました。今まではテレビなど画面を通してしか見てこなかった津波の爪痕を実際に自分の目で見ると、とても言葉では言い表せないほどの恐怖がありました。見学をしている最中に、伝承館で働いていらっしゃる女性

が当時の様子を話してくださり、少しお話しすることができました。その方は多くのことは語らなかったのですが、8年経っても震災がもたらした多くの傷が消えることはないのだということが分かりました。瓦礫を見る前に、津波が押し寄せてくる映像を見たのですが、その映像では、動画を撮っていた方の声も入っていて、この声の方々は助かったのだろうか、今はどんな生活をされていらっしゃるのだろうか、などたくさんのことを考えてしまい、胸が張り裂けそうになりました。

他にも、神社でより高く階段を登り避難した方は無事でしたが、上へ避難しなかったほとんどの方は流されて亡くなったという話を聞いた時、初日にベースで伝えられた注意事項に「万が一、地震が発生した場合、距離よりも高さを稼いで避難してください」と書いてあったことを思い出し、本当にその通りだなと思い、少しの高さの違いが命につながるということを知りました。



写真左：旧気仙沼向洋高校屋上の真下4階の壁。近隣の工場が激突した跡。
写真右：五十鈴神社の鳥居。多くの人がこの神社に逃げて助かった。



活動最終日に訪問したいちご農園の方も、津波の被害に遭われていて、もしボランティアの人たちが来てくれなかったら再開していなかったと仰っていました。作業をしながらのお話の中で、震災直後は瓦礫がたくさんあり、薬をもらいに行くのに丸一日かかり、しかもそれでももらえたのは一つだったこと、その薬がもらえないなどで命を落とされた震災関連死もたくさんあったとのお話を聞き、発生してからすぐの支援が大切なことも知りました。



昆布を結ぶ作業のお手伝い



いちご栽培のお手伝い

震災当時、私たちは小学2年生で地震のことも津波のこともよく分からず、死者や行方不明者の数だけ聞いて、たくさんの方が犠牲になったのだとしか感じていなかったけれど、今回のボランティアを通してたくさんのことを知りました。震災から8年経った今、瓦礫はもうないけれど、被災された方々の心にはずっと残っていることをよく知ることができました。被災地に直接自分の足でいってみたいと津波や地震の恐ろしさもわからないことだらけで、今回のボランティアはとてもいい経験になりました。また後世に津波の恐ろしさを伝えなければならぬと思いました。

ボランティアが終わってから読んだ東日本大震災の本には、まだ知らなかったこと、避難生活のこと、大切な人を失った悲しみがたくさん書かれていました。私は実際に行動を起こし、目で見て感じることで、ただ知っているということはまったく違うことだと気づきました。今度は私たちがボランティアを通して学んだこと、本を通して知ったことを東日本大震災があったことを知らない人・覚えていない子どもたち、大地震・津波の恐ろしさを正しく理解していない大人に伝える

ことが大切だと思います。東北を訪れることができ本当に良かったです。



恋人岬のカップルのモアイ像

このモアイ像の名前は、今回ボランティアに参加した 4 人で考え、選ばれました。名前は「たすけくん」と「あいこちゃん」です。この名前を提案した理由は、モアイ像は復興を目的として作られたため、復興にちなんだ名前がいいと考えたからです。

二つのモアイ像の名前をつなげると「助け合いっこ」となります。復興はみんなの助け合いによって成り立つものだなあとこのボランティア活動を通して感じたため、このような名前を提案し、決定しました。

温かい出会いの中で―カリタス石巻ベースでの交流会 生徒感想文 目黒星美学園中学高等学校

本校では、2012 年 3 月から年に 2 回、宮城県でのボランティア研修を実施しています。7 月 22 日～24 日に実施した 16 回目の活動には、38 名の高校生が参加しました。今回は、1 日目は東松島市での防災学習、2 日目は石巻での植樹活動と小グループに分かれてのコース別の活動、3 日目は亘理町立荒浜中学校の皆さんとの交流会というスケジュールでした。

本校の研修は希望者制で、多い生徒で 5 回参加し、卒業後も宮城を訪ねるつながりも生まれています。今回も一人一人にとって忘れられない経験と出会いを重ねることができました。宮城の皆様のご協力のおかげと心から感謝しております。

今回の研修 2 日目、カリタス石巻ベースでは 11 名の生徒がお世話になりました。活動に参加した生徒の感想をいくつか紹介します。



活動後、被災を受けたベーススタッフから当時の話を聞く生徒たち



ベース利用者の方々とひとつのテーブルを囲んで談笑

私はこれまで地域の方々と交流する機会があまりなく、最初はとても緊張していました。しかし、カリタス石巻ベースに来てくださった皆さんとお話ししていくうちに、緊張もほぐれ、楽しく活動することができました。また、参加してくださった地域の皆さんも楽しそうに

してくださり、とてもうれしかったです。お話ししていく中で、震災当時のお話をしてくださる方も多く、とても勉強になりました。カリタス石巻ベースに来て良かったなと思いました。

私は、宮城での活動に参加するのは 2 回目でしたが、1 回目の時とは、全く違うことを学ぶことができ、私自身、成長することができたと思います。震災が発生した時、私は小学生の低学年でした。当時は、テレビや新聞でしか、津波のことを知らず、あまり深く考えていませんでした。しかし、この活動に参加してから、津波や震災のことをしっかり考えるようになりました。そして、津波の恐ろしさや宮城の皆さんに教えてもらったことを次は、私が家族やこの研修に参加していない友達に伝えていかなくてはと思いました。

生徒 A



手作りうちわをもってみんなで記念写真

地域の様々な方と交流をするという活動は、私にとって初めての経験でした。そのため、私は交流会の企画を考えるとときも内心、「一体何をするのだろう」と思っていて、なかなかアイデアが浮かびませんでした。しかし、実際にこの活動に参加してみたら思っていたよりも会話が弾み楽しかったです。

今回の訪問で特に私の心に残ったのは、地域の皆さんがお祭りの盆踊りを教えてくださったことです。普段は自分の地域の祭りにですら行くことが少ない私ですが、皆さんに教えてもらいながら踊っている中で、石巻の方たちが自分たちの地域の文化をととても大切にしようとしていることが分かりました。石巻は震災の被害が特に大きく、多くのものが失われた地域だと思います。そんな中で失われなかった文化の一つがこの盆踊りだったのでしょうか。文化を大切にしていこうとする地域の方々の姿勢に私は感動しました。

生徒 B



写真上：盆踊りを教えてくださった利用者さんたち

写真下：みんなで一緒に盆踊り♪



カリタス石巻ベースでうちわをつくったり一緒に手話を覚えて歌を歌ったりしました。一番に思い出すのは、みなさんのパワフルさです。特に私の隣に座っていた方がみんなを巻き込んでいくような元気さがありました。皆さん、方言で早口でおしゃべりなさっていたので、初めはその輪に入っていくのが大変に感じました。しかし交流していくうちに何となくの内容は聞き取れたり、お話ししたりすることができたのでとても楽しかったです。

最後、帰るときにみなさんが楽しかったと言ってくれていて、また来てねとも言ってくれたのでとてもうれしかったです。学校の活動でもまた行きたいですが、個人的にもまた行ってお話したり、一緒に楽しんだりすることができたらいいなと思います。 生徒C



手話で「ふるさと」「ドレミの歌」を一緒に歌いました



私は、2日目の午後のカリタス石巻ベースでの活動が一番印象に残っていて、とても楽しかった思い出があります。私ともう一人の友人がボランティアコースのリーダーだったということもあって、慣れない係に少しプレッシャーを感じていたこともあり、いくつか失敗もしてしまいましたが、参加してくださった方も私たち生徒も楽しんで交流することができたし、生徒のメンバーの中でもたくさん協力し合って、いい時間にすることができたのでよかったです。

その日の夜の振り返りの時間に発表していたメンバーもたくさんいましたが、カリタス石巻ベースでのほんのわずかな交流の中で、別れ際に涙を流してくださる方までいて、頑張ってたかなと思いました。今回の活動で出会うことのできた方々とこれっきりにするのではなく、すぐではないかもしれませんが、いつかまた、再会することができたらいいなと思いました。 生徒D



利用者さん一人ひとりと握手をしてお別れする生徒たち

「チーム・カリタス仙塩」 カリタス南相馬と福島浜通りを視察

チーム・カリタス仙塩 園部英俊



仙台と塩釜の8つのカトリック教会の有志からなる東日本大震災被災者支援ボランティアグループ「チーム・カリタス仙塩」は、去る9月14日（土）、カリタス南相馬と福島原発事故被災地をバスで視察しました。北仙台教会6名、元寺小路教会6名、一本杉教会7名、総勢19名が参加。

カリタス南相馬副所長の南原摩利さんが、これまでの活動を通して、出会ったひとびと、感じとったこと、学ばれたことなど交えながら案内をしてくださいました。

あちこちに積まれたフレコンバック（除染処理で出た土の入った大きな袋）、道路一本を隔てて、片側はバリケード封鎖され雑草が生い茂った住まいが並ぶ帰還困難区域、片側は、避難指示解除とされているところ、オリンピックに向けて急ピッチで除染や解体が進められているメインの通り、原発事故の生きた証人として360頭の被曝した牛の飼育を続けている「希望の牧場」などの光景から、原発事故後の厳しい現実が伝わってきます。



南相馬市の小高区にある住民交流スペース「ぷらっとほーむ」では、廣畑裕子さんのお話を伺いました。「避難指示解除になって、戻ってきた人も戻ってこない人もいます。避難指示解除は、元からの住人であろうがなかろうが、誰でも小高に住むことが選べるようになった日です。自分はここに住んではいけないけれど、今、小高を選んだ人が楽しく暮らしていけるように、毎日、楽しいことをやっています。今、結論を求めるのではなく、不安な10年を積み上げるよりも、10年、20年後に良かったと振り返られるように今日一日を楽しく、また明日も楽しくして、それを積み重ねて10年を作っていく、そういう街でありたい」とやさしく、そして熱く語ってくださいました。

視察の終わりに、南原さんは「今日の体験をどうぞ多くの人々に伝えてください。そしてどうぞより多くの人が現地に来てくださいますように」と結ばれました。

私たちチーム・カリタス仙塩は、現在、石巻ベースでのボランティア活動を行っています。私たちが福島復興支援として何ができるのか？ まずは、ともに「見て、聴いて、考えて、伝える」ことから始めたいと強く感じました。

